

言葉「と」音

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2016-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須永, 恆雄 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/18140

言葉「と」音

須 永 恆 雄

モーツァルトのウィーン時代初めの歌劇作品『後宮からの誘拐』でコンスタンツェはセリムの懇ろかつ執拗な、度重なる懇願に、ついに言葉で応じる術なく、歌に託してその胸中を明かす。言葉に拠ったならばさぞや相手の怒りを買うに違いないと慮ったその心中を。

実験的試みに寛容で新手の舞台演出を取り込むことを伝統——と言うのも妙な謂わば反伝統とむしろ呼ぶべきものか——としてきたシュトゥットガルト・オペラに於けるハンス・ノイエンフェルスの手になる演出は、ジングシュピール、即ち歌と芝居を抱き合わせてしかしなお融合浸食し合わない程度にとどめるドイツのオペラのジャンルを、まさに地で行く、というよりそんな度合いを遙かに越えて、かかる浸食融合を解いて各々二つの別物に分ける試み。まさにオペラの伝統の垢を洗い落とし、白日の下に晒す。これを解体としてそれから目を背けるか。あらたな空気が吹き通って、永らく住人を失った、何処かの天災人災に見舞われて人が寄り付かなくなった廃墟もどきの壮観ばかりを誇る館に、風を入れる試みと認めて受け容れるか。まさにそれが観る者に委ねられる、そんな二重仕立ての舞台。

セリムの懇請に耐え切れず、コンスタンツェは音楽に代弁を求める。オペラ第一幕第七場の台詞と歌の移行に、演出家は一言付け加えた。即ち、第六番のアリア直前の、「ああ、それなら御容赦ください」に代えて、言葉の担い手の方の俳優が、歌の担い手の方の歌手に懇願して、曰く、

「音楽を！ 音楽を！

コンスタンツェ、歌って、歌って！
歌ってちょうだい！」

二重仕立ての舞台は即ち、言葉と歌を担当するそれぞれ二人、とはつまり俳優と歌手とから、各登場人物が編成されることとなった。勢い上演時間も全体で倍とまではいかないが、大幅に伸びる結果を招くこととなるのも道理、ときには同じ言葉を台詞と歌に文字通りダブらせる場合も出来る。

コンスタンツェに言ってみればアガペーとしての愛を求めるセリムは、もとよりオペラのタイトルにある通りの後宮を従えてエロスには十分以上に事足りていたはず。しかしまたエロスの充溢のみに物足らず、コンスタンツェに問い質す「いまだに悲しがっているのか」との言葉は、そのまま自らの胸中の不在を託つものでもあったろう。

「いまだに悲しがっているのか、愛するコンスタンツェ？ — 見よ、この美しい夕べを、この魅惑の風景を、この陶然たる音楽を、そなたを求めるこの儂の懇ろな恋心を、— 言ってごらん、この全てを以てしてもついにお前を慰めることは出来ないのか、そなたの心の琴線に触れるものはついにないのか？ — 分かるか、儂はそなたに命ずることだって出来る、痛い目に合わせることだってできるのだが —」

ト書にあるとおり、コンスタンツェの溜息を目にして、
「だがそんなことはすまい、コンスタンツェ、自らすすんで心を捧げてもらいたいのだ、— そなたが自らすすんで —」

そう言われてコンスタンツェも、
「寛大なお方！ ああ、そう出来たらいいのですが、そのお心にお応え出来たならいいのですが — でも —」

と相手の意を迎えるに必ずしも吝かでないことを示唆すると、セリムは畳みかけて真意を糺して、

「さあ言ってお呉れ、コンスタンツェ、言ってお呉れ、何がそなたを躊躇わ

せているのか？」¹⁾

心中を明かせば相手から憎まれる。心 Herz を求めて已まない主を相手に、すでに胸中の心は別の男に捧げてしまったと告げるわけにも行かず、といてここまで話が進んでは、大いなる相手の恋心に拮抗するだけの理由として挙げ得るものなど思いつくわけもない、真実を告げる他は無い、進退きわまった女は、言葉の無為無用を嘆く。その余は音楽の無私作用に救いを求めざるを得ない所以である。

かくて歌に託して胸中の真実を告げることとは相成ったが、歌もセリムの心に宥和を齎すことはここでは未だない。

第二幕にはおそらく全曲中の最深部に位置する憂愁極まる絶望を吐露した第十番のアリアが孤絶の境涯に取り残された——というのはもう一對の恋人同士は囚われの身とはいえ共に囚われて日々顔を合わせる折もあるからだが——コンスタンツェによって自らの過去に哀悼を捧げるように深沈と歌われる、このまさに絶唱の後、侍女ブロンデが近づいて、期せずして第一幕のセリムに似た言葉つきで主をいたわる。

「ああ一番大切なお嬢様！　なお未だ悲しがっていらっしやいますの？」

それに応じてコンスタンツェは、

「あたしの心痛を知っていながらそんなことを聞くことが出来て？——またひとつ日暮れが訪れても、まだ何の知らせもない、何の希望もないの！——出、明日の朝になったら、——ああ、神様！　とてもそんなことは考えられません。」

ブロンデはなおも慰めて、

「少しでもお気持ちを明るくなさいまし。ほら、なんてきれいな夕べですこと、なんて爛漫と万物が私たちに笑いかけてくるよう、なんて嬉しそうに鳥たちが歌へと私たちを誘ってくれること！　ふさぎの虫をお封じなさい、元

気を出して下さい！」

コンスタンツェはそんな侍女の気軽さに、

「なんてお前は幸せなの、こんな運命に見舞われてもそんなに平気でいられるなんて！ ああ、私もお前のように出来たなら！」

とコンスタンツェは先にセリムに向かって答えたのとこれまたいささか似たような言い回しが随所に交じった返答²⁾。

ブロンデには、いつも、と言うわけには今や行かないにせよ、その傍らに恋人ペドリッロが在り、遥かに到来する筈のバルモンテによる救出を確信していればこそその落ち着きと明朗快活の堅持であるが、その希望的観測の一端をコンスタンツェと分かち合う間もなく、いつの間にかセリムが近づいてくる。

目下唯一の関心事であるコンスタンツェの愛の獲得に懊悩しつつ、未だ明けない明日への約束をいまひとたび迫って、

「さあコンスタンツェよ、そなたは僕の願いを考えてくれておるか？ じきに日が暮れる、明日はそなたは僕を愛してくれなければならぬぞ、さもなければ——」

と、それがむしろ、コンスタンツェの反抗を呼び覚ます逆効果となる。

「愛さなければ、ならないですって？ なんと愚かな願いですこと！ まるで愛を命ずることがお出来になるかのようですわ、ちょうど人を存分に打擲するのと同じように！……」

自ずから成る恋心以外を健気にもあくまで肯んじない。死を覚悟のその敢然たる態度にセリムは驚きまた感嘆しつつも、一瞬の苦痛の閾を越えれば憧れの恋人と異次元に結ばれることを願う相手の、その死を欣求する一言を聞くや、支配者は容易にその次元を隔てる垣を越えさせてなるものかと、さらに拷問の責苦を振りかざして、目の前に居ながら果てしなく隔てられた意中の人に縋りつく。翻意を促したい一心に恥も外聞も忘れて。

その甲斐もなく、毅然としたアリアが立ち上がる。

即ち、第十一番コンスタンツェのアリアは、あらゆる拷問をも甘んじて受ける覚悟の果敢な心映えを歌う歌だが、死をも厭わずと云ってのけたものの、流石にあらゆる類の拷問の脅迫を以て迫られると、言葉のコンスタンツェは震え戦いて失神する。歌のコンスタンツェがそれを受けて立ち、代わって歌を敢行するのである。

「すすんで、怯むことなく

選び取りましょう、どんな苦痛も苦難も。

さあ命令を下しなさい、

罵りなさい、怒鳴りなさい、お怒りなさい、

終いには私を死が救ってくれますから。」

この終いのくぐりでは言葉を支える音楽は怒涛のように上下する音階の逆巻く滝となって荒れ狂うが、それはあるいは言葉や意味から随分と懸け離れた純粹な物理的運動に墮することを余儀なくされる³⁾。

脱出の計略が敢無く潰え去った後、一同絶望の淵に沈むところで、コンスタンツェが一言挟む。演出上の工夫による追加である。

即ち、第三幕第七場、第二十番の二重唱が始まる前に

「暗い森の中で怖くなった子供たちなら、どうするでしょう？ 歌うのです！ 歌うのです！」⁴⁾

かくしてベルモンテとコンスタンツェのデュエットが始まることとなるが、それは懲りず悟らずのベルモンテをコンスタンツェが諭して次第に、男も宥和と悟りの境地に近づく次第を描くこととなる。どこか『魔笛』第一幕の尋ね人を探し当てたパパゲーノが、パミーナと二人して誘拐ならぬ逃亡の緒に就くところで、悟らないパパゲーノのささやかな独身の嘆きをパミーナが慰める無垢のデュエットを想わせないでもない。

ちなみにコンスタンツェとベルモンテの二重唱が、先ずは後者の前者への

それを受けて前者の後者への、詫びと釈明と反省とそれに対する許しと、さらには共に赴く死出の旅路と来生での結合への希望のみならず信念から成るとすれば、パパゲーノとパミーナの二重唱は素朴な子供の嘆きが慰められてたちまち希望に満ちた愛の賛歌へと昇華する。前者が時折、少し後の作となるフリーメーソンの葬送音楽 (KV 477) の痛切な嘆きの刃に刺し貫かれるとすれば、後者は二世紀を経る遙か後代にやがて映画《愛のあらし》の絶滅収容所にまで持ち越された究極の愛の営みを伴奏することになる。

この宥和の眺めにセリムの心もまた思いがけなくも春の陽射しに融解したもののか、千載一遇の復讐の好機を放り出して、目には目をの悪無限の輪を脱却するかの如き決断が下される。その判決はしかし言葉で語られた後に期待されるように歌へと羽化を遂げることがない。即ちセリムは言葉だけの存在で、したがってこの役には俳優と歌手の二本立てが成立しない。代わりに即興を駆って演出家は言葉の歌、即ち言葉の範囲内で歌への昇華を遂げるべく、散文から韻文へと転轍して即ち、メーリケの詩をセリムの口に上らせる。

「ひともとの樅の緑なす、何処に
誰が知ろう、森の中に；
ひとむらの薔薇、誰が言おう、
何処の苑に？
いずれもすでに選ばれている、
思え、おお魂よ、
汝の奥津城に根ざすべく
そして生い育つべく、と。

二頭の黒い若駒が草を食む
牧場であって、
いずれも巷へと帰り行く

澆刺と飛び跳ねつつ。

いずれもが一步一步と歩を運ぶことになろう

汝の棺を曳いて；

もしかするとそれは、もしかするとまだ

二頭の蹄の

蹄鉄が離れ落ちて、

火花を散らすのが私に見えるより先かもしれない⁹⁾。

ポヘミヤの古謡の一節と、この何行かをその末尾に配する『ブラハへ旅するモーツァルト』の断り書きにはあるが、なるほど民謡ならではのどことなく不思議な詩行である。時間はここで何処とも計りがたい視点から俯瞰されて、いずれ起こることが、今の風景の中に予感される。どこか同じ詩人の、幼子イエスと同じく未だ緑なす若木である将来の磔刑の十字架とを同じ図柄に納めた『小さな絵に寄せて』⁶⁾を想わせるところなしとしない。両者ともに、後顧の憂いの種が牧歌の中に秘められていることを気遣うことが必ずしも杞憂に終わらないことへの感慨を誘う。

『魔笛』の試練は、もとより神与のものならぬ人の与えるもの、つまりある距離をとって外から眺めた叡智（乃至新たな一宗教）の教えに基づくものと少なくとも現代の我々の目には映ると言ってよいか。そこから、何とはなしに作られたもの、敢えて言えば一種のゲームのような選別可能な、とは即ち唯一無二の、その中に我々自身が否応なしに、言うなれば人与のものでもない必然として内包されているものとは考えずに済ましているから、この試練もまたあるいは失敗すれば死を以て購わなければならない掟が控えているにせよ、どことなく宙吊りの、つまりは作られた装置、くらいの抽象性を以てしか観客に迫ってこない。この距離感と、タミーノの切実そのものの、一目惚れのパミーナへの恋心、つまりは有無を言わせぬその具体の力との対照が、

まさに相拮抗してその正否を問われる場面が、試練の門をくぐって参入しようとする場面である。とすればこれこそ全曲の要、転回点をなすものであると言うに如くはないが、そこでタミーノを導く、というより初めは反駁し論駁する僧侶の役は、これが歌ならぬ言葉に委ねられている。とは言う条、音高は指定されて叙唱風に語られるから純然たる科白ではない、すでに歌芝居の則をはみだす中間形態にさしかかっている。一途に恋を求めて猪突猛進してきたタミーノは、あらためてその動機の委細を問糺され、また神殿の荘厳さと悪漢ザラストロのイメージの余りの背反に愕然として、混乱と全般的不信に陥る。まさに自らの拠って立つ基盤を揺るがされるに至る。已むなく、自ら中絶した問答の埒外に、探し求める対象の存否を気遣うと、姿無き声、しかも複数の、とは即ち人格を持たない無明の虚ろに木霊するかの如き声々が臚に期待通りの内容を呟く。その呟きはしかしすでに歌へと移行して、恰もヴァーグナー前派といたい幽遠な空間を拓く。

最小限の内実に節約された言葉はすでにその抑揚だけで事足りるのはいか。それに応えて感謝の歌を奏でる魔法の笛はもとより言葉を持たないが、それでもあるいはそれ故にこそ、森羅万象を慰める得る。言葉の意味によって肅々と理を積み重ねてゆく問答のちょうど対極がここにあるが、そうであればこそ普遍の言葉としてそれは通用する。森羅万象を悦ばすことが叶う。顧て、絶体絶命のタミーノが辛くも聞き届け得た姿無き声による示唆もまた、意味の言葉とは別のところに即ちその慰めの調べによってこそ意を達するものであったかもしれない。

ところで、偶々、昨年のクリスマス・イヴに鈴木忠志のエレクトラの舞台に接する折があった。台詞は神話的素材のソポクレスの悲劇をホーフマンスタールが作品化したものに拠るが、先ずは車椅子に乗ったコロス役の男たちが音もなく現れると、整然たる幾何学模様の円周運動を舞台上に展開し、勢揃いの足踏みの衝撃によって観客を脅迫する。やがて同じく車椅子に乗って

登場するエレクトラは女優が演じるものの、およそ女とは思えない低い声域で台詞を喉の奥から絞り出すように発する。台詞の一部はときに男性陣のコロスによって担われるが、日常語の表現を用いたその言葉の数々はことごとく、およそ日常の発声からほど遠い様式化されたものであるのは、素材が初めの一回限りの具体性をすでに脱却して、祖型のようなものとなって反復可能であることにも応じたものか。ひとしきりして、しばしの後に登場するクリテムネストラもまた、元オリンピック選手を務めたこともある運動選手という経歴のアメリカ人女優によって、爾余の俳優たちの日本語と平行してこちらは英語で、同じく常の女声ならぬおそろしく低い音域で朗唱される。

声はすれども姿は見えず、というのではない。姿と声とが結びつかないのだ。意表を衝く、この齟齬。視覚と聴覚のずれは、もちろん常軌を逸した感覚の意識から来る。そこから生ずる新鮮なエロスの驚き。性転換の後に声だけが残る。逆転したところにカストラート、閨を踏み越える前に足を奪われた足無し天使の空中遊泳。或いはチベットの声明の地の底からどよもすようなモノの声、とても人間のなせる業とは納得できない。ホーミーの、響洞が音を発するのであって人の肉声というより筐体の響きだけの空虚、底抜け。いずれも言葉の具であることを忘れさせるに足る誘惑に満ち満ちている。そこに魅せられて、沈黙のしじまが、発話者というより発声者を取囲んで包む。

極度の集中を以てする傾聴を求め、また観客もそれに惹きつけられて魅入られたように耳澄ます静謐が客席を満たしたが、それはもはや意を伝えれば済む言葉の機能を超えた次元に初めて生じ得たものであったろう。言葉はそこで伝達の具として届けるべき情報の故ではなく、そのたたずまいそのものに存在理由を得る。その言葉自体の実体によって存在する、とすればそれが伝え届ける内容はその言葉のおかげで生きる、甦る。

かかる靈妙な力に儂い期待をこめてコンスタンツェも亦、言い難い事柄を託すに足るものたらんと願ってそれを歌に託したのではなかったか。初めの

試みはただし相手に通じることなく、言葉から伝えるべき事柄を手渡された音楽は、言葉に成り代わって相手の心を和らげるに足りない。劇の最終局面に至り、いよいよ危機に臨んで、相思相愛の恋人同士が互いに死を覚悟しつつ相手に許しを求め且つ相手を許す、その宥和の光景を目の当たりにして初めて、単にこの度の恨みのみならず一世代前にも遡る宿業を罰すべく復讐すべく極刑を課すべきセリムの心積もりも亦、宥和の妙音に浸されて、その憤怒の塊が俄かに解け、やがて罪人を解放する慈しみに席を譲る。

ただしその慈愛の心はそれを乗せて羽ばたく翼を持たない。音楽に乗って飛翔する代わりに、言葉そのものが変容を遂げ昇華する必要に駆られてこそ、あらぬ方から詩を借りて掉尾を飾ることとなった。

《注》

1) **Siebenter Auftritt.**

Selim, Konstanze.

SELIM. Immer noch traurig, geliebte Konstanze? immer in Thränen? -- Sieh, dieser schöne Abend, diese reizende Gegend, diese bezaubernde Musik, meine zärtliche Liebe für dich -- Sag', kann nichts von allem dich endlich beruhigen, endlich dein Herz rühren? -- Sieh, ich könnte befehlen, könnte grausam mit dir verfahren, dich zwingen --
Konstanze seufzt.

SELIM. Aber nein, Konstanze; dir selbst will ich dein Herz zu danken haben -- dir selbst --

KONSTANZE. Großmüthiger Mann! o daß ich es könnte! daß ichs erwidern könnte -- aber --

SELIM. Sag, Konstanze, sag, was hält dich zurück?

KONSTANZE. Du wirst mich hassen.

SELIM. Nein, ich schwöre dir's. Du weißt, wie sehr ich dich liebe, wie viel Freyheit ich dir vor allen meinen Weibern gestatte; dich wie meine Einzige schätze --

KONSTANZE. O so verzeih!

(元の台詞の一行 O so verzeih! を太字で示した三行に演出家を変更した)

Musik! Musik!

Konstanze, sing, sing!

Sing!

Nr. 6: Arie

Ach, ich liebte,
 War so glücklich,
 Kannte nicht der Liebe Schmerz!
 Schwur ihm Treue
 Dem Geliebten,
 Gab dahin mein ganzes Herz:
 Doch wie bald schwand meine Freude,
 Trennung war mein banges Loos;
 Und nun schwimmt mein Aug' in Thränen,
 Kummer ruht in meinem Schoos.

KONSTANZE. Ach, ich sagt' es wohl, du würdest mich hassen. Aber verzeih, verzeih dem liebekranken Mädchen!—Du bist ja so großmüthig, so gut—Ich will dir dienen, deine Sklavinn seyn, bis ans Ende meines Lebens: nur verlange nicht ein Herz von mir, das auf ewig versagt ist—

SELIM. Ha, Undankbare! Was wagst du zu bitten?

KONSTANZE. Tödtete mich, Selim, tödtete mich! nur zwinge mich nicht, meineidig zu werden—Noch zuletzt, wie mich der Seeräuber aus den Armen meines Geliebten riß, schwur ich aufs feyerlichste—

SELIM. Halt ein! nicht ein Wort! Reize meinen Zorn nicht noch mehr. Bedenke, daß du in meiner Gewalt bist—

KONSTANZE. Ich bin es: aber du wirst dich ihrer nicht bedienen, ich kenne dein gutes, dein mitleidvolles Herz. Hätte ichs sonst wagen können, dir das meinige zu entdecken?—

SELIM. Wag es nicht, meine Güte zu mißbrauchen—

KONSTANZE. Nur Aufschub gönne mir, Herr! Nur Zeit, meinen Schmerz zu vergessen—

SELIM. Wie oft schon gewährt ich dir diese Bitte—

KONSTANZE. Nur noch diesmal!

SELM. Es sey! zum letztenmale!—Geh, Konstanze, geh! Besinne dich eines Bessern, und morgen—

KONSTANZE *im Abgehn*. Unglückliches Mädchen! O Belmonte, Belmonte!

[Wolfgang Amadeus Mozart: Die Entführung aus dem Serail. Wien 1782, S. 15–17.

<http://www.zeno.org/nid/20005712920>]

- 2) BLONDE. Ach mein bestes Fräulein! noch immer so traurig?

KONSTANZE. Kannst du fragen, der du meinen Kummer weißt?—Wieder ein Abend, und noch keine Nachricht, noch keine Hofnung!—Und morgen—ach Gott! ich darf nicht daran denken.

BLONDE. Heitern Sie sich wenigstens ein bisschen auf. Sehn Sie, wie schön der Abend ist, wie blühend uns alles entgegen lacht, wie freudig uns die Vögel zu ihrem Gesang einladen! Verbannen Sie die Grillen, und fassen Sie Muth!

KONSTANZE. Wie glücklich bist du, Mädchen, bey deinem Schicksal so gelassen zu seyn! O daß ich es auch könnte!

BLONDE. Das steht nur bey Ihnen, hoffen Sie—

KONSTANZE. Wo nicht der mindeste Schein von Hoffnung mehr zu erblicken ist?

BLONDE. Hören Sie nur: ich verzage mein Lebtag nicht, es mag auch eine Sache noch so schlimm aussehen. Denn wer sich immer das schlimmste vorstellt, ist auch wahrhaftig am schlimmsten dran.

KONSTANZE. Und wer sich immer mit Hoffnung schmeichelt, und zuletzt betrogen sieht, hat alsdenn nichts mehr übrig als die Verzweiflung.

BLONDE. Jedes nach seiner Weise. Ich glaube bey der meinigen am besten zu fahren. Wie bald kann ihr Belmont mit Lösegeld erscheinen, oder uns listiger Weise entführen? Wären wir die ersten Frauenzimmer, die den türkischen Vielfraßen entkämen?—Dort seh' ich den Bassa.

KONSTANZE. Laß uns ihm aus den Augen gehn.

BLONDE. Zu spät. Er hat sie schon gesehen. Ich darf aber getrost aus dem Wege trolen, er schafte mich ohnehin fort. *Im Weggehen*. Kourage! wir kommen gewiß noch in unsre Heimath.

[Wolfgang Amadeus Mozart: Die Entführung aus dem Serail. Wien 1782, S. 27–29.

<http://www.zeno.org/nid/2000571298X>]

3) Nr. 11-Arie

KONSTANZE?

Martern aller Arten

Mögen meiner warten,

Ich verlache Qual und Pein.

Nichts soll mich erschüttern,

Nur dann würd' ich zittern,

Wenn ich untreu könnte seyn.

Laß dich bewegen,

Verschone mich!

Des Himmels Segen

Belohne dich!

Doch du bist entschlossen.

Willig, unverdrossen

Wähl' ich jede Pein und Noth.

Ordne nur, gebiethe,

Lärme, tobe, wüthe,

Zuletzt befreyt mich doch der Tod.

[Wolfgang Amadeus Mozart: Die Entführung aus dem Serail. Wien 1782,
S. 29-31.

<http://www.zeno.org/nid/20005712998>]

4) Was tun die Kinder, wenn sie sich im dunklen Wald fuerchten?

Singen! Singen!

5) Ein Tännlein grünet wo

Wer weiß, im Walde;

Ein Rosenstrauch, wer sagt,

In welchem Garten?

Sie sind erlesen schon,

Denk es, o Seele,

Auf deinem Grab zu wurzeln

Und zu wachsen.

Zwei schwarze Rößlein weiden

Auf der Wiese,

Sie kehren heim zur Stadt

In muntern Sprüngen.

Sie werden schrittweis gehn
Mit deiner Leiche;
Vielleicht, vielleicht noch eh
An ihren Hufen
Das Eisen los wird,
Das ich blitzen sehe!

[Eduard Mörike: Sämtliche Werke in zwei Bänden. Band 1, München 1967.
S. 620f.]

成立年は1852年から55年にかけて。初出：Morgenblatt für gebildete Stände
(Stuttgart), Nr. 30-33, Juli und August 1855.]

6) **Auf ein altes Bild**

In grüner Landschaft Sommerflor,
Bei kühlem Wasser, Schilf und Rohr,
Schau, wie das Knäblein Sündelos
Frei spielet auf der Jungfrau Schoß!
Und dort im Walde wonnesam,
Ach, grünnet schon des Kreuzes Stamm!

[Eduard Mörike: Sämtliche Werke in zwei Bänden. Band 1, München 1967,
S. 766.]

(すなが・つねお 法学部教授)